

金融機関と地域の資金循環を

「ともに苦勞し、つくりあげる」

東京海上アセットマネジメント新社長の長澤和哉氏は地域金融機関との「地方に資金が循環する仕組み」の構築を考へる。ゼロ金利では描けなかった世界を「一緒に苦勞してストーリーをつくる」と話す。先の読めない時代だからこそアクティブ運用会社が飛躍する舞台が完全に整った。

次のテーマ 常に探る

——指名委員会の推薦による社長就任だ。

当社は外資系企業からの招へいは初めて。海外経験の豊富さが評価された。投資環境が過去の延長線上にはなく、グローバルな市場の中で日本の運用会社をどう経営していくか、を熟考したと思う。親社の東京海上ホールディングスも半分以上を海外で稼ぐ世界的グループになり運用会社経営も世界視野が必要だ。

——なぜアクティブ運用会社の時代なのか。

経済は政治に支配されるためマクロ経済も不確実性の「ゆらぎ」がある。中長期的特性を眺め、どうポートフォリオをつくり全体を管理する

3、6、10年後の世界で必要となることを顧客に伝える。宇宙ファンドの純資産が7月2000億円超に。まさに壮絶らしい商品のひとつ。過性ではない未来を眺みに行っている。「10年後の未来が見えている」ということが重要だ。それを選び先進的、創造的なプロダクトをそろえ、顧客がベストな資産運用ができるようにする。

——地域金融機関とのスクラムの組み方。

地方の資金が首都圏に流れず地域での循環を促す協業ができる。地域金融機関の融資と当社の未上場株式などのプライベート資産を組み入れた創造的ファンドを組成、踏み込んでいく。また余資運用の幅も広がってくるはずだ。これから親密地銀のトップなどアイデアを練っていきたい。ゼロ金利時代にはできなかった話で金利ある世界だからこそ実現できる。成功モデルが出れば競争原理が働く、そこからパイ自体が広がる可能性に期待する。



東京海上アセットマネジメント
長澤 和哉社長に聞く

◆ながさわ・かずや 1994年慶応大大学院理工学研究科修了、明治生命(現明治安田生命)入社。98年ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメントへ、2007年計量運用部長・経営委員会メンバー。12年MSCI日本代表、18年北アジア(日本・韓国)代表、21年アジア太平洋地域統括責任者・グローバル経営委員会メンバー、25年6月から現職。神奈川県出身、56歳。

2025/9/1 金融経済新聞 掲載

※金融経済新聞社の許諾を得て利用